

平成 27 年 9 月 7 日

南の風号外Ⅱ

南部ミニバスケットボール連盟
会 長 藤原 敬一

号外の続きです。

手足を動かし続けること、これは基本中の基本です。ミニバスの選手でもできます。しかし、**最後までやり続けることは至難の業です**。徹底するのは、本当に難しいのです。特にハンドワークはミニバスから中学、高校の選手にはお手本となりました。ボールの前に手があること、また視野を隠すように手があることは、ポールマンにとっては厄介です。中国の選手はプレイが限定され、中へ（ポスト）タイミングのよいパスを供給することができませんでした。

また、ファウルに対する対策もきちんとしていました。手の使い方が悪いと、ファウルを取られるケースが多くなります。特に国際試合では、基準の違いもありプレイヤーは苦勞することがあります。しかし決勝では、ファウルを取られることも想定内、という意識が各選手にあったように思われます。私が一番感じた選手は、吉田選手でした。相手とのディスタンスが絶妙でした。シリンダーをしっかりと意識して、仕掛けどころと我慢する場面のディフェンスの軽重が見事でした。今大会、吉田選手のファウル数は少ないのですが、決勝の中国戦は1つでした。ペイントエリアを守った渡嘉敷選手、間宮選手もファウルが2つずつという少なさでした。冷静に相手にアジャストしていました。一方中国は、決勝戦のファウルの全体数が9つ、と日本より1つ少ないのですが、（日本は合計10）どう鼻奥目に見てももっとありました。特にペイントでのファウルはもっと多かったはずです。

そして、足も最後までしっかり動いていました。最終日ということもあり、疲れはピークだったと思います。吉田キャプテンは、決勝前に「今日は、ぶっ倒れてもいいから足を使おう」と全員に言っていたそうです。ヘルプに行く足、ダブルチームに行く足、トラジション時に帰る足など必死に頑張っている姿が印象的でした。

勿論ディフェンスだけでなく、オフェンスでもトラジション時の足が止まることはありませんでした。切り替えを全員が意識し、足を使ってそれぞれが役割を果たしていました。

次にオフェンスです。点数で言えば、本川選手の24点、渡嘉敷選手の18点、山本選手の16点、この3人で中国（全体で50点）を上回りました。

戦術的に見た内訳は、渡嘉敷選手のポストプレイとペリメーターのジャンプショット（フェーダウェイを含む）、本川選手の3ポイント4本（7本中）とスチール、速攻がらみの得点が光りました。そして忘れてならないのは、山本選手の3ポイント2本と（1Pのブザービートショットは入っていたと思います。）、速攻絡みの10点です。たいへん効果的でした。速攻で言えば、走るタイミング、パスのタイミングが絶妙でした。リバウンドからの速攻は緻密に計算された効率抜群の精度でした。吉田選手のパスの正確さ、本川選手と山本選手のランナーとしての走り、そして体を張ったフィニッシュ（中国の長身選手のチャレンジショットを潜り抜けてのショット）は、観ていて身震いがしました。また、町田選手と山本選手の速攻は、2人とも富士通レッドウエーブでチームメイトということもあり、相性抜群でした。これらの速攻は、中国の戦闘意欲を削ぐのに十分でした。次号は号外の続きと全中の続きです。